歴史総合を見る目

—史学史の視点から—

相原高校　**上野　信治**

はじめに

「歴史教育」に影響を与えているものとは何だろうか。学校教育であれば教科書や学習指導要領、あるいは受験業界の動向なのかもしれない。学校の外でも、博物館や資料館などは歴史教育に深く関わっている。本稿では、新科目「歴史総合」が目指す授業を『高等学校学習指導要領(平成30年告示) 解説　地理歴史編』(以下『解説』) から読み取り、1. 歴史学の歴史がこの新科目にどのように影響を与えているのか　2. 現場での授業展開はどのようなものが考えられるかについて検討・提案する。

2022年度から始まった「歴史総合」であるが、実施している学校現場では「今までの日本史Aと世界史Aを足した科目」だとか「1年間では全ての範囲が終わらない」といった声が少なくない。その背景には「歴史総合」という新科目が目指している理念が現場には十分伝わっていないことが考えられる。

1　歴史総合の背景と狙い

ここでは『解説』を読み解きながら、歴史総合の理念を確認する。

『解説』P6　(1) ①現行学習指導要領の成果と課題

…一方で、主体的に社会の形成に参画しようとする態度や、資料から読み取った情報を基にして社会的事象の特色や意味などについて比較したり関連付けたり多面的・多角的に考察したりして表現する力の育成が不十分であることが指摘されている。

…近現代に関する学習の定着状況が低い傾向にあること、課題を追究したり解決したりする活動を取り入れた授業が十分に行われていないこと等も指摘されている。

本稿では大きく2点に注目する。

1.「社会に参画しようとする態度」や「表現力」の育成が不十分であること
2.「探究活動」が不足していたこと

が重要だと考える。歴史総合はこれらの課題を踏まえたものとなっている。

『解説』P21～23　歴史総合における改善・充実の要点

ア：「社会的事象の歴史的な見方・考え方」に基づく学習活動の充実
イ：「主題」や「問い」を中心に構成する学習の展開
ウ：単元や内容のまとまりを重視した学習の展開
エ：歴史の大きな変化に着目し、世界とその中の日本を広く相互的な視野から捉える内容の構成
オ：資料を活用し、歴史の学び方を習得する学習
カ：現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察する学習

とまとめられている。

これまでの授業と大きく変えなければならない点とはどこか。最も大きな点は「教師が何を教えるか」という視点ではなく、「生徒は何ができるようになったか」に焦点が移った

ことであろう。つまり「生徒は歴史的な見方・考え方を身に付けたか」であったり「歴史の学び方を習得することができたか」といった視点で私たちは授業を振り返る必要がある。すると当然ながら教科書の記述全てを解説する必要などなく、授業内容の取捨選択を積極的に行うことが求められる。学習指導要領では歴史総合の内容とその取り扱いについて、大項目・中項目・小項目と階層化してまとめられているが、実際に授業を行う上では小項目から内容を取捨選択していくと年間の計画も立てやすいと考える。

歴史総合は授業展開についても規定がある。大単元のはじめには「生徒が資料から問いを表現する」という活動があり、大単元のまとめには「生徒が主題について考察し、表現する」という活動がある。先述した「現行指導要領の課題」をふまえた展開になっていることは明らかであろう。そしてこういった授業展開を進める上で、後述する史学史の知見を活かすことができると考える。

2　授業実践案①　「鉄砲伝来から、“歴史の学び方”を理解させる」

歴史総合を実践する上では、生徒にもこの科目がこれまでの歴史の授業とどう異なるのかを伝える必要があるだろう。ここでは、大項目A 歴史の扉「歴史の特質と資料」での実践を紹介する。「鉄砲伝来」に関する５つの資料読み解きワークを通して、生徒にも歴史の学び方とはどういうものかを理解してもらうことが狙いとなる。

ワーク１：「日本に鉄砲を伝えたのはどんな人だと習いましたか？小中学校の学習を思い出して答えてください。」という問いに答えさせる。歴史の学習において仮説や予想が重要であることを強調する。

ワーク２：資料（南浦文之『鉄砲記』）を読んで生まれた疑問・気になったことを書かせる。ここでは資料にもとづいて過去を明らかにすることを体験させる。

ワーク３：（ポルトガル側の資料『新旧発見記』を読んで）ワーク２の資料と矛盾する点、新たに読み取れた情報をまとめさせる。年号や資料の作成時期の違い・立場の違いなどにも気づかせたい。

ワーク４：教科書の引用文を読み、ワーク１～４の資料を総合的に捉えさせる。（ポルトガル人は倭寇の船に乗せてもらっていた可能性が高いという結論を導く）

ワーク５：教師が複数の文献からまとめた記述を読み、「鉄砲伝来の主役は倭寇だったといえるのはなぜだろう？」という問いに答えさせる。そして、これまでの資料の違い（一次資料・二次資料、教科書など）に気付かせる。

まとめ：資料から学習していく基本的な姿勢を確認させる。結論の暗記ではなく、資料から結論を導く姿勢を身に付けるための科目なのだという点を強調したい。

3　授業実践案②　「主題学習」

歴史総合では大単元のまとめとして、主題学習の機会が設置されている。『解説』にも実践のための例が多く紹介されており、今回はそれを参考に授業案を作成した。

この実践案では、クラスを10個のグループに分けて授業を展開する。学習指導要領に例示されている５つの観点（自由・制限、平等・格差、開発・保全、統合・分化、対立・協調）を各グループに担当させる。

ワーク１：諸資料から読み取れたことの確認

ワーク２：読み取ったことと、現代的な諸課題との類似を考えさせる
ワーク３：探究したい主題を決定させる
ワーク４：主題に関わる歴史事項の確認
50 分でワーク４までの成果を発表させ（中間発表）、教員によるフィードバックを必ず行う。生徒が考えた主題について、あまりにも広く抽象的すぎるものや資料が見つかりにくいもの、探究の余地がないものがあればその都度評価をして修正させる必要があろう。その意味で中間発表は重要である。

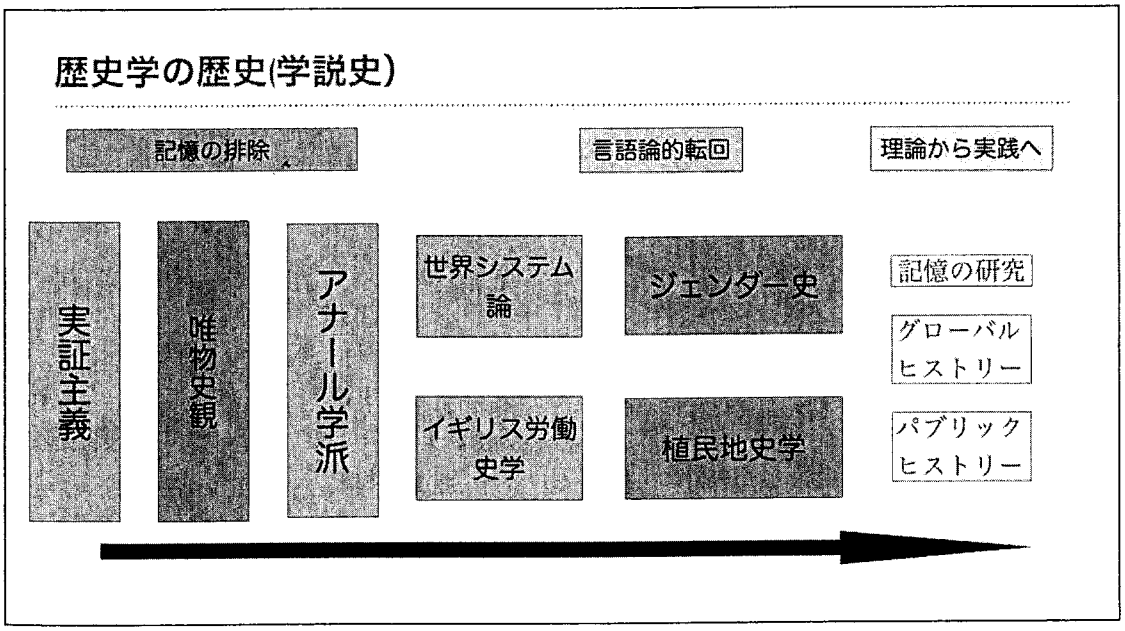
主題学習の目標は、学習指導要領の小項目にある通りである。幸いにも歴史総合の教科書や資料集は資料が豊富に掲載されている。それらを大いに活用し、「生徒は歴史的な見方・考え方を身に付けたか」や「歴史の学び方を習得することができたか」といった視点で主題学習も振り返る必要があるだろう。生徒が探究した内容が稚拙だとしても、諸資料を読み取り、仮説を立て、資料から結論を導くという歴史学の学び方を習得させることがこの学習の狙いである。

生徒にどこまでの探究活動を求めるかについては、生徒の実情に応じた設定が必要であろうが、筆者の過去の実践のなかで探究活動にふさわしいと感じた問いはいくつか覚えている。（アヘン戦争前後の東アジアを学び）「近代化していった中国と日本で協力するという考えは、当時の人々にはなかったのか？（もしくはできなかったのか？）」。（アメリカ独立戦争を学び）「なぜ身分は平等になったのに、奴隷はなくされなかったのか？」。これらの素朴な問いは授業後の振り返りプリントで提示されたものだが、歴史総合ではこうした問いをもとに、資料を活用しながら生徒が結論を導く学びが求められている。

4　歴史学の歴史

ここまでは歴史総合の考え方や授業案を紹介した。はじめに述べたように、歴史教育はさまざまなものから影響を受けているが、ここからは「歴史総合」に歴史学が与えた影響について見ていく。

歴史学の展開を簡潔に図式化すると次のように表せる。



紙幅の都合で学説史のすべてを紹介することは難しいが、史学史を顧みることは歴史総合を実践するうえでも有効だと考える。ここでは、(A) 実証主義　(B) アナール学派　(C) イギリス労働史学　(D) 世界システム論　を中心に取り上げる。

(A) 実証主義（ランケ学派）

「歴史学の父」とよばれる偉人は一人ではないが、「近代歴史学の父」と表現するならばやはりランケ(1795-1886)が筆頭にあがるだろう。彼は若い頃に歴史小説家の作品に感銘を受けたが、実際に資料を調べてみると小説の内容が史実とはかけ離れていることに衝撃を受け、過去の事実を客観的に明らかにすることが重要だと考えた。科学が台頭する19世紀という時代背景のなかで、彼は「科学としての歴史学」を確立させることに尽力した。史料批判を繰り返すことで事実に接近しようとする姿勢は、歴史総合においても当然求められる。歴史学徒でもない生徒たちに厳密な史料批判を求めることは難しいが、複数の資料にあたってみたり、資料の信頼度を検討する姿勢は、歴史総合を通して身に付けさせるべき資質ではないだろうか。

一方で、実証主義（ランケ学派）は感情を排除した客観的な史料を重視したため、公文書を扱うことが中心であった。それ故に、描かれる歴史は国家や為政者が中心となった（事件史・政治史・大人物史）。それに対する批判は異なる学説を惹起することになる。

(B) アナール学派

実証主義が「客観的な歴史」を標榜するのに対し、フェーブル(1878-1956)やブロック(1886-1944)らは「客観的な歴史などあり得ない」と批判した。なぜなら、あらゆる史料を読み解き、過去のすべての再現することは不可能であり、ゆえに歴史とは「自分の問題関心に沿って資料を選択していく過程」だと考えられるためである。

こうした考え方は歴史総合の主題学習にも反映されている。生徒たちに現代的な諸課題を意識させ、そこから資料を検討していく作業は、アナール学派の姿勢そのものである。授業実践する際にも、現代的な諸課題をまず生徒に理解させること・何らかの問題意識を持たせることから、探究学習は始まることになるだろう。

(C) イギリス労働史学

実証主義で中心史料として扱われる公文書から描く歴史は、国家や為政者中心となる。これを批判する文脈で、異なる視点から過去を明らかにしようとしたのがトムスン(1924-93)であり、イギリス労働史学とよばれる。彼は民衆や労働者の視点から歴史を描こうとし、労働者が残した私文書、労働組合の記録、労働者が好んだ詩などこれまで実証主義が無視してきた資料を積極的に取り入れた。

歴史総合において『解説』では単元のはじめに生徒が「問いを表現する」活動が重視されているが、そこでの取り扱いについては、

> 「問いを表現する」とは、近代化に伴い生活や社会が変化したことを示す資料から、情報を読み取ったりまとめたり、複数の資料を比較したり関連付けたりすることにより、生徒が興味・関心をもったこと、疑問に思ったこと、追究したいことなどを見いだす学習活動を意味している。　『解説』P141　B 近代化と私たち　(1)近代化への問い

と説明されている。ここからわかるように、歴史総合では生活の変容も分析の対象となっている。すると公文書だけでなく民衆の残した資料も授業に登場することが大いに考えられる。授業で生徒の反応を見ていても、感情のない公文書よりも生々しい私文書や身近な生活に関する資料は興味を惹きやすいように感じる。当然ながらアナール学派の主張もふまえて、教員は生徒の問題関心がどのようなところにあるのかを考えて資料を提示してい

く必要がある。

(D) 世界システム論

実証主義は公文書を中心史料として過去を分析したことで、ナショナル・ヒストリーとして歴史を描くことが多かった。そこで、国家の枠組みを超えて過去を分析しようとしたのがウォーラーステイン(1930-2019)である。彼はアフリカの困窮の起源を資本主義システムから説明し、大航海時代が大きな意味を持ったと分析した。近年の世界史教科書や資料集にもしばしば登場する世界システム論だが、ナショナル・ヒストリーを相対化する理論として重要な意味を持つ。

歴史総合は「歴史の大きな変化に着目し、世界とその中の日本を広く相互的な視野から捉える内容の構成」(『解説』P22) が意識されており、自国の動向だけでなくグローバルな動向もふまえて歴史を捉える科目である。世界システム論がそのまま受容されたとは言えないが、ナショナル・ヒストリーではない歴史を展望している点でこれまでの歴史教育の領域とは異なっているといえる。また生徒が探究学習に取り組むうえでは、例えば川北稔『砂糖の歴史』のように身近なモノから歴史を考察していくことも考えられる。同時に自治体史のようなローカルな資料にも、グローバルな影響が潜んでいることがある。筆者の勤務先である県立相原高校は創立 100 年に及ぶ高校であるが、学校の記念誌には戦時中の体験談が多く残されており、探究に用いる資料として役立つことが期待できる。歴史総合の３つの軸である「近代化」「国際秩序の変化や大衆化」「グローバル化」を考察していくうえでは、ローカルな資料も大いに役立つことを強調しておきたい。

おわりに

新科目「歴史総合」はまだ始まったばかりで、多くの現場では試行錯誤の毎日が続いている。一方で従来の科目と同様に受け止められ、歴史総合の主旨が十分に浸透し（あるいは受容され）ていない現状もある。本稿は「史学史の視点から」という副題ではあったが、歴史総合の新しさの一つである主題学習（探究学習）の実践に寄与できればという想いで報告した。新学習指導要領では歴史総合以外にも生徒は多くの科目で探究的な学びに取り組むことになっており、生徒は探究活動で疲弊してしまわないか不安ではあるが、だからこそ教員はフィードバックと評価を丁寧に行っていく必要があるだろう。「歴史の学び方」を多くの高校生が身に付け、よりよい社会の実現に寄与していくことを期待したい。

≪参考文献≫

小田中直樹『歴史学のトリセツ』(ちくまプリマー新書、2022 年)

小田中直樹『歴史学って何だ？』(PHP 新書、2004 年)

河野哲也『問う方法・考える方法「探究型の学習」のために』(ちくまプリマー新書、2021 年)

東京大学教養学部歴史学部会『歴史学の思考法』(岩波書店、2020 年)

桃木至朗『市民のための歴史学　テーマ・考え方・歴史像』(大阪大学出版会、2022 年)

桃木至朗『わかる歴史・面白い歴史・役に立つ歴史』(大阪大学出版会、2009 年)

成田龍一『方法としての史学史　歴史論集 1』(岩波書店、2021 年)

成田龍一『危機の時代の歴史学のために　歴史論集Ⅲ』(岩波書店、2021 年)

福井憲彦『歴史学入門』(岩波書店、2006 年)

南塚信吾、小谷汪之『歴史的に考えるとはどういうことか』(ミネルヴァ書房、2019 年)